

# Hoffman の共感喚起理論の概観

松尾良和\* 松下姫歌\*

A Review of Hoffman's Theory for Empathic Arousal

Yoshikazu Matsuo\* & Himeka Matsushita\*

Hoffman (2000) have proposed five distinct modes of empathic arousal; that is, mimicry, classical responding, direct association, mediated association, and role-taking. We examined role-taking in detail from the view point of clinical psychology and psychotherapy (Matsuo & Matsushita, 2007; Matsushita & Matsuo, 2007), but not the other modes. A purpose of this paper is to examine Hoffman's concepts of modes of empathic arousal from the view point of clinical psychology and psychotherapy.

Key words : empathy, modes of empathic arousal, psychotherapy, "as if" quality

## 1. 緒言

Rogers(1957)は、心理療法における治療的人格変化の必要十分条件を公式化し、治療者側の態度の一つとして、共感(empathy)をあげている。この共感是他者をその内面から理解する方法であり、“『学派』を問わず心理療法で強調される(小林, 2004a)”要件の一つと考えられている。しかし一方で、Rogersの共感の概念に関しては、その実践のための理論がないこと(河合, 1970)、抽象的に表現された記述をどう読み解くのか(小林, 2004b)という問題が指摘されている。

このことを踏まえ、松下・松尾(2007)では、数あるRogersの共感概念の記述を詳細に再検討するとともに、その理解と実践に資する新たな観点を提供するものとしてHoffman(2000 菊池他訳 2001)の共感喚起理論からrole-takingを取り上げ、その有用性を示した。しかし、一方で、Hoffmanの共感喚起理論には、role-takingのほかにも四つの様式(①マネ、②古典的条件づけ、③直接的連合、④媒介連合)が存在するが、これらについては未検討のままであった。

河合(1970)や小林(2004b)が指摘するようにRogersの共感を理解し、実践していくうえで足りないところがあるならば、それを補うための新しい観点を考察してみたり、また、他の役立ちそうな理論や考えを参考、援用したりすることも大切であろう。もともとHoffmanの理論は、

---

\* 広島大学大学院教育学研究科(Graduate School of Education, Hiroshima University)

心理臨床における共感を取り上げたものではなく、主に、日常の場面、とくに愛他的状況下で、自然と相手の気持ちが感じられてくるような類の共感を、発達心理学的立場から述べたものである。しかし、そこには、Rogersの共感の記述には示されていない、共感がどのようにしてもたらされるかという共感喚起に関する理論が示されている。松下・松尾（2007）で試みたように、この新しい考えを臨床心理学的視点から捉えなおすことで、Rogersの言わんとした共感へのさらなる接近、とくにそれを実現していくための観点を得ることが期待できると考える。

そこで、本論では、みられる松下・松尾（2007）で試みたように、Hoffman（2000 菊池他訳 2001）において述べられている共感喚起様式に注目し、なかでも、松下・松尾（2007）では取り上げなかった、role-taking以外の四様式を臨床心理学的視点から検討することを目的とする。

## 2. Hoffmanの共感喚起理論の概観

### 2-1. Hoffmanの共感理論の概要

Hoffmanは、アメリカの心理学者であり、道徳性とその発達に関心をもつなかで、その重要な影響要因として共感に注目し、それに関する理論化を行っていった。緒言において触れたように、Hoffmanの理論は、臨床心理学的視点から共感を捉えようとしたものではなく、発達心理学的・社会心理学的立場からのものである。そのため、そこで扱われているのは、臨床心理学で重視されるような、より能動的に相手の内的世界を理解していく方法としての共感ではなく、どちらかという受動的に自然と相手の気持ちが感じられるような、より広い意味、一般的な意味での共感であると思われる。このことは、Hoffman（2000 菊池他訳 2001）が、共感を“自分自身よりも他人の置かれた状況に適した感情的反応”と比較的広範な意味を含む定義づけを行っていることにもあらわれているといえるだろう。

Hoffmanの理論は、主に、共感の発達理論と、共感がどのようにもたらされるかという共感喚起理論とにわけられる。まず、共感の発達については、人が心身ともに自他未分化な状態からはじまって、それが分化した状態へと発達する過程を背景としている。Hoffman自身によっては、とくに触れられてはいないが、このような考え方は、Piaget（1964 滝沢訳 1968）が提示した子どもの自己中心性と脱中心化というその発達方向と同様の観点を含むものであると思われる。

共感喚起理論の背景にはこの共感の発達理論があり、(a)心身ともに自他未分化なときから可能であるとされる生得的な喚起様式から、(b)やがて身体的には、自他が分化した存在であることが認識された頃に可能となる、過去経験をもとにするもの、そして、(c)心身ともに自他が分化したことが認識されて可能になる高度な認知的処理を必要とするものまで、五つの様式を提示している。すなわち、①マネ、②古典的条件づけ、③直接的連合、④媒介連合、⑤role-takingである。以下、これらの喚起様式を各々見ていくこととしよう。

### 2-2. マネ

一つ目は、マネ（mimicry）とよばれるものであり、模倣と求心性のフィードバックに基づくとされている。相手の感情のあらわれである表情や声、姿勢などを模倣すると、その模倣した表情な

どの情報が脳に送られ、それに基づく感情が主体のなかに生じる求心性のフィードバックが生じるというのがこの様式の眼目である。模倣の対象は、実際に目で見えるような模倣だけではなく、たとえば、頬や眉間の筋肉の緊張や緩みなどの微妙な筋肉の動きでも起こりうるとされる。意識的な作用や認知的な処理は必要とされず、その反応は反射に近いものである。そのため、マネによる共感、意識的な模倣によるというよりも自動的、無意図的に起こることが強調され、また、身心ともに自他未分化な存在であると考えられている、生後間もなくの赤ん坊にでも可能であるとされている。

### 2-3. 古典的条件づけ

二つ目は、古典的条件づけ (classical conditioning) である。これは無条件刺激、無条件反応という関係に、条件刺激が対呈示され続けることで、条件刺激と無条件反応が結びつくことによる。たとえば、母親が赤ん坊をやさしく抱きしめることは、赤ん坊にとって心地よい感じを生じさせるだろうが、このようなとき、母親がそれを微笑みながらするなら、やがて、赤ん坊は、微笑のみによっても心地よく感じるようになるということである。この場合、赤ん坊にとっては、やさしく抱きしめられることが無条件刺激、それによって感じる心地よさが無条件反応、そして、微笑みが条件刺激ということになる。こうして、ある状況の手がかりによって、特定の感情が直接的に喚起されるということが成立する。条件づけの成立という過去の経験が必要であるという点はマネと異なるが、やはりその反応は反射的なものであり、本人の意思とは関係なく、無意図的、自動的に共感が喚起されるという点では同じであるといえるだろう。

### 2-4. 直接的連合

三つ目は、直接的連合 (direct association) とよばれるものである。表情や声といった相手自身に関する手がかりや、その相手が置かれている状況を、自分自身の過去の経験に直接結びつけて捉えることで生じる。たとえば、過去に交通事故にあった者が、目の前で目撃した事故の犠牲者の様子や現場のありさまから自分の事故経験が思い出されて、そのときの苦痛が喚起されることが当てはまる。ここで起こっているのは、自らの事故経験が眼前の状況により呼びおこされて、その過去経験に結びついていた感情が喚起されているということである。古典的条件づけと同様、過去の経験が一つのポイントではあるが、直接的な連合のほうは、それを成立させるために刺激の組合せが必要ない点で異なる。すなわち、この様式において生じる反応は、自分の過去経験と他者の状況的な手がかりが、古典的条件づけのように反復対呈示によって、現実にも組み合わせられたりした結果ではないということである。また、マネや古典的条件づけのように反射のような反応とはことなり、刺激と反応の間が過去経験やその記憶という観念的なものに媒介されている点でも異なる。ただし、この様式もまた本人の意思とは関係なく、無意図的、自動的に共感を喚起しうるので、この点はマネや古典的条件づけと同様といえるだろう。

### 2-5. 媒介的連合

四つ目としては、媒介的連合 (mediated association) があげられる。この様式は、基本的には直接的連合と同じメカニズムであり、生じてくる感情は、想起された自分の過去経験に由来している。ただ、直接的連合が、相手や状況に関する手がかりと直接接触することを必要とするのに対して、

媒介的連合では、言葉のような意味的な処理を必要とする過程を通じて手がかりを得るという点で異なる。たとえば、自分のなかのスポーツで優勝しときの経験が呼び起こされ、そのときの高揚感が生じるような場合を考えてみよう。それが、試合の観戦中に優勝の歓喜のなかにある選手を直接見て生じている場合は、眼前の状況を手がかりとしているので直接的な連合といえる。一方で、これがスポーツの優勝記事を読んで生じている場合は、記事を読むという意味的な処理と解説によって媒介されているので、こちらは媒介的連合ということになる。換言すれば、直接的連合はより直接的な視覚的・聴覚的イメージと、媒介的連合は言語的なイメージを手がかりとしている。このため、直接対面したことのない人や架空・空想上の人に対しても、話や伝聞、文字などを通じて、共感が喚起しうることが可能となる。ただし、こうした認知的処理を必要とするとはいえ、この様式は連合に基礎を置いているため、その反応は本人の意思とは関係なく、無意図的、自動的に喚起されうるものである。

## 2-6. role-taking

最後、五つ目としては、**role-taking** があげられる。それは、想像的に他者の立場や状況に立つことであり、それにより他者の内的世界を体験するための方法である。このような考え方自体は、社会心理学者の Mead (1934 稲葉他訳 1973) がその役割理論のなかで、人の社会化の過程を説明するために「他人たちの位置に自分自身を置く」という言葉で用いた **role-taking** や、Piaget (1964 滝沢訳 1968) が子どもの認知発達に伴って徐々に可能となるとした、他者の物理的・心理的視点を認知的にとる **perspective-taking** にもみることができる。ただし、Hoffman の **role-taking** は、そこからさらに進んで、この他者の立場に認知的・想像的に立つというあり方には性質の異なる二種類が存在することを主張している点にその特徴がある。

その一つ目が、自己注視的 (**self-focused**) とよばれる **role-taking** である。これは、想像的に立った相手の立場や状況で、自分が感じることをもとにして、その人の内的世界を推しはかるあり方とされる。その特徴を一言でいうならば、自分の内的世界という色眼鏡を通して相手をみているということである。そのため、この自己注視的な **role-taking** により感じられるものには、相手の体験よりも自分の体験が色濃く反映されている可能性がある。

一方、Hoffman が主張する二つ目の **role-taking** は、他者注視的 (**other-focused**) とよばれるものである。これは、相手の感情や内的世界に直接注意を向けて推しはかるあり方とされる。より具体的には、仕草や表情、態度などといった外面にあらわれてくるあらゆる種類の表示や、相手に関して知っている情報、たとえば、性格や家庭環境などをもとにする。その特徴は、相手の内的世界を見るに際して、自分の内的世界という色眼鏡を通して見ようとしないうところにあるといえるだろう。このため、他者注視的 **role-taking** による共感とは、他者の内的世界により忠実なものになると考えられる。

Hoffman (2000 菊池他訳 2001) は、このような両 **role-taking** の関係について、各々は独自にも、同時並行的にも働きうるものであると考察している。この点について検討したのが松尾・松下 (2007) であり、調査研究のデータに基づく因子分析の結果からそのことが確認された。つまり、両 **role-taking** が、共感するなかでそれぞれお互いへの移行が可能であるということ、両者が同時並

行的に働くことも可能であるということが示唆されている。

### 3. Rogers の共感について

ここまで見てきた Hoffman の共感喚起様式を臨床心理学的視点から捉えなおして検討する前に、Rogers の共感について簡単に触れておくこととしよう。緒言で紹介したように、Rogers の共感については、松下・松尾 (2007) で取り上げて詳細な検討を行ったが、そこで考えられたことは次のように要約できるだろう。

(1)Rogers の共感は、クライアントの内的世界をより忠実に理解するための方法であり、そのために重視されるのが“as if”quality である。(2)その“as if”quality の実現のためには、自分と相手の間の線引き、自他の区別が重要であり、(3)同時にそれをもちつつ相手の内的世界に入っていく、その世界をありありと感じていく必要がある。(4)こうしたなかで、もし自分と相手との間の線引きが失われれば、自分と他者の内的世界の混同が起こり、相手の内的世界を忠実に見ていくための視点が失われ、それは共感とはいえなくなってしまう。(5)“as if”quality を維持しながら相手の内的世界を推しはかっている際は、自分が感じるあらゆる感覚が手がかりとなるが、それを相手に確認し続けることで自分と相手の内的世界のチューニングをしていく必要がある。

これらの特徴を踏まえると、Rogers の共感にとって必要とされるのは、ただ相手の内的世界が感じられればよいような類のものではなく、より能動的に、正確に相手の内的世界に接近していくためのこころの働きであるといえよう。ここで注目したいのは、“as if”quality に含まれている二つの側面と Hoffman の二つの role-taking とには、重なる部分があると考えられることである。すなわち、“as if”quality の一つ目の側面 (上述の(2)) は、他者注視的 role-taking の、相手の内的世界を自分のそれを通すことなく直接みていこうとする側面と、また“as if”quality の二つ目の側面 (上述の(3)) は、自己注視的 role-taking の、相手の内的世界を自分のそれを通してみることで自分のもののようにありありと感じられる側面とが一致しているように思われる。

以上のような考えをもとに、我々 (松尾・松下, 2007; 松下・松尾, 2007) は、Hoffman の共感喚起理論のなかでも、とくに role-taking をとりあげ、それを臨床心理学的視点から捉えなおすことの有用性を示した。Hoffman の二つの role-taking を、他者の内的世界を推しはかるときの心理学的な構えとして捉え、その各々のはたらき方の組み合わせにより、“as if”quality の観点を含んだ共感がどのような様相を呈すると考えられるかを検討したのである。より具体的には、他者注視的 role-taking、自己注視的 role-taking のどちらかの側面のみが前景に出ているのではなく、両 role-taking が同時に強く働いている状態こそ、Rogers が主張する共感のあり方に最も近いと推測された。

それではこのように、role-taking が、それを“as if”quality の観点を含んだ心理学的な構えとして捉えることで、Rogers の共感の理解と実践に資すると考えられる一方で、今回、主に扱いたいと考えているマネ、条件づけ、二つの連合という四つの様式は、Rogers の共感に対してどのような位置づけで捉えることが可能であろうか。このことに関して、Hoffman (2000 菊池他訳 2001) が、

二つの **role-taking** がはたらいっているうらでは、これら四様式が主体の共感的反応を強めたり弱めたりする役割を担っていることを示唆している点に注目したい。この **Hoffman** の示唆から考えられることは、**role-taking** によって生じる共感、他の四つの様式のあり方によって影響されうることである。つまり、四つの様式は、**role-taking** の心理学的な構えとしてはたらきというよりも、共感にとってもっと根本的な、共感する主体の側に共感的な諸反応をもたらすはたらきに関係していると考えられる。そのため、これら四様式の特徴を踏まえながら、それを臨床心理学的視点から検討することで、二つの **role-taking**、さらには **Rogers** のいう共感のさらなる理解の視点につながる事が期待できると思われる。そこで、以下、マネ、条件づけ、二つ連合の各々について、臨床心理学的視点から検討を試みたい。

#### 4. 臨床心理学的視点からみた **Hoffman** の共感喚起様式の検討

##### 4-1. マネ

マネの特徴は、相手の表情などを意識的・無意識的に模倣することによって、その相手の内的世界で起こっていることに接近できるということにある。そのメカニズムは求心性のフィードバックという、より生物学的な機構にささえられており、換言すれば、「いきもの」としての人が共通してもっているところのはたらきともいえるだろう。それだけに、これにより生じる共感的反応もまた「いきもの」としての人が感じるような、よりプリミティブで、それだけにこころの奥底から直接わいてくるようなものであるようにも思われる。そのため、マネによってもたらされる共感的反応は理屈ぬきに感じられるものであり、また、内容的には喜び、悲しみといった単純なものでありながら、主体に及ぼす影響は想像以上に大きいことが推測される。

心理臨床において、このようなマネによる共感が問題になる場面をあげるとするならば、それが無意識的にはたらいしているときが一つには考えられるだろう。そのマネをしている相手の表情なり、語調なりが、本当にその内的世界を忠実に反映したものであるならば、マネによる共感には確かにその他者の内的世界に即したものとなりうる。しかし、マネをしているものがその相手の内的世界を反映したものでない場合、マネによる共感はその世界からずれたものになることは想像に難くない。

たとえば、相手の語っている語調は明るい、その表情が暗いとき、どちらがより相手の内的世界を反映したものかは一見だけではわからない。そこで「わからない」と気づけるならば、それは少なくとも自分の感じているものをそのまま相手の内的世界のものとしてみるのではなく、より忠実にその世界を見ようとしているあらわれとも考えられる。その意味で、それは“as if”quality をより含んだ共感であり、そのあり方は他者注視的 **role-taking** に近づくものともいえるだろう。

一方で、マネによって共感もたらされていることに気づくこともなく、“わからない”とも感じられないような場合、それは自分自身知らずのうちにやっているマネによってもたらされているものを相手の内的世界でおきていることとして、単純に結びつけて扱っている可能性を多分にはらんでいると思われる。それは、**role-taking** でいえば、自己注視的 **role-taking** の側面のみが強く働いている状態であり、両 **role-taking** の側面を必要とすると考えられる“as if”quality を含む共感とは

程遠いものであるといえよう。

このような危険を避けるため、まず、マネという様式によって自分も気づかぬうちに共感していることがあるのだということを知っておく必要があるだろう。そして、その上で、自分が感じているものを相手に伝えながら、それが本当に相手の内的世界に即しているかを相手に確認し続けることである。それは、Rogers (1957; 1975) が、彼のいう共感にとって必要なこととして指摘しつづけたことであり、同時に、“as if”quality の実現にとっても重要なことであると思われる。

また、このような場合とは別に、相手の内的世界についていま一歩ありありと感じられないようなとき、マネはその世界へ入っていくための一助ともなるだろう。表情を、仕草を、語調を、外面にあらわれている相手のあらゆる表示を意識的にマネしてみる。それにより、求心性のフィードバックが生じ、相手の内的世界をより強く感じる契機となりうると考えられる。それは他者の直接的な表示に注目するという意味では他者注視的 role-taking の側面を含み、マネを通して自分が感じることで相手の世界に接近していくという意味では自己注視的 role-taking の側面を含むともいえ、この両者が揃うならば、“as if”quality を含んだ共感に近づく手段になりえよう。ただし、この場合も、マネによって感じられることのみを頼りにしつづけていたのでは、結局は相手の内的世界からずれていく危険性を内包しており、それは“as if”quality が欠けた共感に墮する可能性をはらんでいる。そのため、この場合でも、自分の感じたものを相手に伝えつつ、その正しさを確認し続けることが重要であるだろう。

#### 4-2. 条件づけ

古典的条件づけによってもたらされる共感には人間に生得的に備わっている条件づけという機構によっており、そのため、これもマネと同じように「いきもの」としての人間がもともと持っているものにもとづくものであるといえるだろう。それだけに、これによってもたらされる反応もやはりマネと同様に、内容的には単純でありながらも、理屈抜きに、こころの奥からわいてきて強い影響を与えうるようなものであると考えられる。

心理臨床において条件づけにもとづく共感が問題になるとするならば、この様式が、マネと異なって完全に本人の意図とは別のところで無意識的にはたらきうるものであるという点に求めることができるだろう。自分の知らないうちに影響力の強い共感的反応がもたらされ、それに引っ張られているばかりでは、他者の内的世界により忠実な共感、“as if”quality が実現した共感とはかけ離れたものになっていく危険があると考えられる。また、この様式にもとづく反応の成立は、古典的条件づけにおける無条件刺激と条件刺激の反復対提示という経験を必要とするが、それすらも本人の意図とは離れたところで起こっているのだから、いったい自分のどの反応が条件づけにもとづいているのかを特定することは困難であるとも推測される。

しかし、一方で、条件づけによる共感には、他者からの表示を手がかりとして、それに基づく共感的反応を主体のなかに自然にもたらしてくれるものであり、一概に“as if”quality の実現にとって有害であると断定するのも早計であろう。最大の懸案は、これにもとづく反応が他者の内的世界に忠実たらし、 “as if”quality にいかに近づけることができるかということである。そして、そのためには、マネのところでも繰り返しみたように、その感じたものを確認し続けることが一つには重

要になってくると考えられるが、先述の通り、条件づけは無意図的・無意識的にはたらきうるので、気づくこと自体が困難という問題がある。そこで、第一に重要なのは、このような性質をもった条件づけによってもたらされる共感的反応が存在することを知り、相手の内的世界を推しはかろうとするときには、その存在をこころの片隅においておけることではないだろうか。このことは、自分の感じているものが必ずしも相手の内的世界に即していないかもしれないということに気づかせる一助にもなり、そのことが他者の内的世界へより忠実に接近していこうというこころの動きにつながりうると考える。

#### 4-3. 連合

連合は、きっかけとなる相手の情報に直接に接する直接的連合と、言語情報を介して接する媒介的連合の二種類が存在するが、両者とも連合という同じはたらきをもとにしていることから、ここでは一括して連合として扱い、検討していきたい。この連合という様式は、相手の情報によって自らの過去の体験が想起され、そこに付随する自らの感情経験を相手にそのままあてはめることで、その相手と同様の経験をしているものとして感じるこころのはたらきである。この特徴から、マネや条件づけのような悲しい、嬉しいといった単純な感じだけではなく、より豊かな共感が可能になると思われる。それは自分の経験をもとにしているからこそ感じられるものであり、なににだから楽しい、これこれだからよけい悲しいというような、その感じの根拠にもふれることができれば、自分も経験しているからこそ感じられるような意味や感じの深さにもつながりうるだろう。

このような連合による共感とは、自分の内的体験を通して相手のそれをみようとしているともいえ、そのあり方はまさに自己注視的 *role-taking* に通じるものである。“as if”quality が自己注視、他者注視の両側面を必要とする以上、この連合のみによる共感とは自己注視的なあり方に傾いており、Rogers のいわんとする共感とは異なるものであると考えられる。

しかし、一方で、この連合のはたらきを含む共感のすべてが“as if”quality の実現をはばむわけではなく、むしろ、“as if”quality の実現に役立つものでもあるだろう。たとえば、他者の内的世界をありありと感ずるためには、外から、客観的に眺めているばかりではなかなかその実現は難しい。やはり、いくばくかはそこへ自分を入り込ませていくことが必要なのではないだろうか。その具体的な態度こそが、相手の内的世界を自らも経験してみることであり、そうすることで相手の内的世界をある種の実感をもって感じるということが可能となると思われる。*role-taking* でいうなら自己注視的なあり方をとるということになろうが、それが相手の内的世界を理解していくための契機にもなると考えられるのである。

ただし、このように自分の内的世界で起こることのみを通して、相手の内的世界を判断している、“as if”quality もたちどころに失われてしまうのは想像に難くない。自己注視的な側面のみならず、他者注視的側面も含んで、はじめて“as if”quality は成立しているといえるからである。そのため、連合にもとづく共感が自己注視的なものであるならば、同時に他者注視的な側面を担うなにかも働かせていなくてはならない。それは相手の内的世界に関するあらゆる手がかりに注目することであり、その具体的な方法の例をあげるならば、一つにはマネによる共感も使えると思われる。連合にもとづいて感じられるものにひたるばかりではなく、外面にあらわれている相手の表示に自ら



チューニングしていくことでその内的世界に接近することが可能であるだろう。

ただし、いずれにせよ、自らの感じているものを相手に確認し続けていく態度を忘れてはならないのは、マネや条件づけと同様であろう。そうすることで、自分の感じているものと相手の内的世界の間のずれに気づいたり、その間を埋める動きにつなげることが可能となる。また、人のところが常に動き、変化し続けていることを考えると、あるとき、あるものをもとにして感じられた一つのものに浸っているだけではなく、そのときその瞬間の相手の内的世界を推しはかり続ける必要があると思われる。イメージとしては相手の世界にぴったりと“ついていく”感じであろうか。このためにも、自分なかに生じる感じを確認しつづけ、それをガイドとして相手の内的世界を推しはかりつづける態度が、“as if”quality を含む共感にとって、やはり重要であると考えている。

## 5. 結語と今後の課題

以上、本論では、Hoffman (2000 菊池他訳 2001) が提出した共感喚起様式について、とくに role-taking 以外の4つの喚起様式に注目し、検討を試みた。そこからは、これら四様式は、共感のなかでも、他者の内的世界を推しはかたり、ときには相手と接することのみで自分のところにより直接的、より受動的に感じられてくるものと関係があると考えられた。また、このような類の共感的反応をもたらすものを知り、それを意識しておくことは、Rogers が共感において重視した“as if”quality を実現しつつ、他者の内的世界へと接近していくために有用な観点を提供する可能性を示した。

今後の課題としては、Hoffman の共感理論における、共感の発達理論を整理することがあげられる。そこには、Rogers (1957) の共感においても重視される、自他の区別という観点が含まれているので、これを整理、検討することは有用であると思われる。この際、心理臨床において蓄積されている自他の区別に関する知見を援用しながら、共感やその発達について検討することで新しい観点を提供することが期待できると考える。

## 引用文献

Hoffman, M. L. (2000). *Empathy and moral development*. Cambridge: Cambridge University Press.

(菊池章夫・二宮克己(訳) (2001). 共感と道徳性の発達心理学——思いやりと正義とのかかわりで 川島書店)

河合隼雄 (1970). 日本における心理療法の発展とロジャーズ理論の意義 教育と医学, 18, 11-16.

小林孝雄 (2004a). 認知心理学からみたクライエント中心療法——「共感的理解」という「理解のあり方」の検討—— 村瀬孝雄・村瀬嘉代子(編) ロジャーズ——クライエント中心療法の現在—— 日本評論社 pp.189-202.

小林孝雄 (2004b). 「状態」としての共感的理解の定義を再検討する——ロジャーズの記述の比較

- 検討—— 人間科学研究(文教大学人間科学部), **26**, 67-75.
- 松尾良和・松下姫歌 (2007). Hoffman の role-taking の観点からの共感尺度作成の試み 日本青年心理学会第 15 回大会発表論文集, 64-66.
- 松下姫歌・松尾良和 (2007). Rogers の共感に関する Hoffman の role-taking の観点からの検討 広島大学大学院教育学研究科紀要 第三部(教育人間科学関連領域), **56**, 171-180.
- Mead, G. H. (1934). *Mind, self and society*. Chicago: University of Chicago Press.  
(稲葉三千男・中野収・滝沢正樹(訳) (1973). 現代社会学体系 10 精神・自我・社会 青木書店)
- Piaget, J. (1964). *Six etudes de psychologie*. Paris: Denoel.  
(滝沢武久(訳) (1968). 思考の心理学—発達心理学の 6 研究 みすず書房)
- Rogers, C. R. (1957). The necessary and sufficient condition of therapeutic personality change. *Journal of Consulting Psychology*, **21**, 95-103.
- Rogers, C. R. (1975). Empathic: an unappreciated way of being. *The Counseling Psychologist*, **5**, 2-10.